

財団法人日中医学協会  
隻共同研究等助成金－日本人研究者派遣－報告書

平成 21 年 3 月 16 日

財団法人 日 中 医 学 協 会 御 中

貴財団より助成金を受領して行った訪中交流について報告いたします。

添付資料：訪中報告書

受給者氏名：田村友秀



所属機関名：国立がんセンター中央病院

所属部署：総合病棟部 職名：部長  
〒 104-0045

所在地：東京後文京部築地 5-1-1

電話：03-3542-2511 内線：7067

1. 助成金額：150,000 円

2. テーマ

血液サンプルを用いた上皮成長因子受容体（EGFR）遺伝子変異の検出及び臨床研究の意見交換

3. 成果の概要（100字程度）

中山大学がんセンターの若手教授陣の熱意ある活動、豊富な患者数など、急速な発展と大きなポテンシャルを実感できた。日本の状況を紹介し、今後のがん臨床・基礎研究における連携について具体的に意見を交換した。

4. 招聘機関

機関名：中山大学がんセンター 代表者名：Zhang Li 職名：教授

所在地：651 Dongfeng Road East, Guangzhou, China 510060

5. 滞在日程概要（日付、主な旅程・行事等）

2月23日（月）	夕食会	がんセンター長、教授人と意見交換
2月24日（火）	午前	双方の施設、研究活動の紹介と討議
	午後	病棟および研究施設を視察
	夕食会	小細胞肺がん治療について講演 (出席者150名)
2月25日（水）	午前	基礎研究、新薬開発について討議 共同基礎研究について打ち合わせ

## 一日中医学協会助成事業

# 血液サンプルを用いた上皮成長因子受容体（EGFR）遺伝子変異の検出及び臨床研究の意見交換

研究者氏名 田村 友秀  
所属・役職 国立がんセンター中央病院  
・総合病棟部長

### 要旨

中国広州の中山大学がんセンターZhang 腫瘍内科教授からの招聘により、2泊3日のスケジュールで同センターを訪問した。若手教授陣の熱意ある診療・研究活動、我々の施設を大きく上回る豊富な患者数、国際共同試験への積極的な参加など、中国のがん研究の急速な発展と大きなポテンシャルを実感することができた。日本のがん研究の状況についても紹介し、今後の臨床・基礎研究における連携について具体的な意見交換を行った。日本のこれまでの実績、緻細な診療・研究技術と中国の潜在能力を融合することで、近い将来、日中両国が世界のがん研究の中心となることが期待される。

### 目的

中国広州の中山大学がんセンターを訪問し、腫瘍内科 Zhang 教授、Liu 医師（昨年まで当院に1年間留学）らと、日中の肺がん診療の現状や問題点、臨床サンプルを用いたトランスレーショナル・リサーチをはじめとする今後の共同研究の可能性について意見を交換する。

### 研究内容

#### 〔渡航計画〕

渡航者 田村友秀（国立がんセンター中央病院総合病棟部長）  
同伴者 小泉史明（国立がんセンター中央病院11F支援施設）  
渡航期間 平成21年2月23日～25日（3日間）  
訪問地 中華人民共和国広州  
訪問施設 中山大学がんセンター（Sun Yat-Sen University Cancer Center）  
招聘者 Zhang Li（張力）腫瘍内科教授

#### 〔活動内容〕

2月23日（月） 夕刻、東京より広州に到着  
歓迎夕食会 Yi-Xin センター長、Guan 名誉教授、Rui-hua 副センター長、Zhang 教授らと意見交換

2月24日（火） 午前8時30分～11時00分  
がんセンター内会議室にて会談

- ・ 中山大学がんセンターについて概説（Ma 教授）
- ・ 国立がんセンター中央病院および研究所について（田村、小泉）
- ・ 中山大学がんセンター腫瘍内科での臨床研究（Zhang 教授）
- ・ 国立がんセンター中央病院における臨床研究、トランスレーショナルリサーチ（田村、小泉）

午前10時30分～12時30分

	がんセンター内の病棟、研究施設を視察
	午後2時30分-5時30分
	がんセンター講義室にて講演と質疑 (Zhang 教授司会、出席者 150 名)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「小細胞肺がん治療における最近の進歩」 (田村)</li> <li>・ 「がん化学療法におけるバイオマーカー研究」 (小泉)</li> </ul>
	午後7時より夕食会
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Xiao-Eeng 教授らと基礎研究について討議。</li> </ul>
2月25日(水)	午前
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Liu 医師の研究について打ち合わせ</li> </ul>
	午後、広州出発、夜 東京到着

### 結果と考察

中華人民共和国の中山大学がんセンターの Zhang Li 腫瘍内科教授からの招待を受け、国立がんセンター中央病院 11F 支援施設の小泉医師とともに、同センターを訪れた。Zhang 教授の部下である Liu Junling 医師が日中医学協会日中笹川医学奨学金制度により当院肺内科および 11F 支援施設に 1 年間留学したことがきっかけであり、Liu 医師の研究継続の支援、および肺がん診療・研究に関する交流と今後の共同研究の土台作りが訪問の目的である。

中山大学がんセンターは、中国第 3 の都市である広州市の中心部に位置する。1000 を超える病床をもつ大病院であり、従事者も国立がんセンター中央病院の 3 倍以上である。教授陣は 40 代の若手が多く、活気に満ちている。肺がん診療では、年間の新入院患者数は約 1000 例であり、当院の 3 倍以上である。肺がん臨床研究では、数多くの国際共同治験に参加しており、登録症例数も各試験で世界のトップクラスを占めている。中国で開発された薬剤を含む、新薬の第Ⅰ相試験にも意欲的に取り組んでいる。基礎研究においても、中国で見出された分子標的薬の評価などにおいて、徐々にそのレベルを上げてきていているようである。その一方で、診療現場や診療の手順においては、荒削りと思える一面も感じられた。総じて、若いスタッフの臨床研究、基礎研究への意義込み、多くの患者数など、近い将来世界の中心的存在となりえる、大きな可能性が強く感じられた。

我々の講演に対しては、若手医師より数多くの質問があり、予定時間を大きく超過してしまうほどであった。「小細胞肺がんに対する最新の治療」「分子標的治療のバイオマーカーに関するトランスレーショナル・リサーチ」に関して、すでに実績のある日本から多くを学ぼうとする熱意が伝わってくるものであった。

今後の基礎・臨床研究の連携に関しては、日中両国、さらに韓国などを加えた「東アジアにおける東洋人を対象とした研究」の重要性、必要性について双方の認識を確認することができた。これまで、新薬承認システムなどレギュレーションの違いなどの障壁により臨床共同研究の実施が困難であったが、近年になり国際共同開発が強調、推進され、実現は目の前までできたと言えよう。Liu 医師の研究については、現在の進行状況を確認し、培養がん細胞の調達、試験キット入手の援助、今後の実験計画など、具体的な支援の段取りを決めることができた。

今回の中山大学がんセンターの訪問により、中国のがん臨床・基礎研究への熱意とポテンシャルの高さを実感し、また将来の共同研究に関しても討議することができ、極めて有意義であったと考える。

作成日 2009 年 3 月 16 日